

英語教育における nonverbal communication の意義

藤 田 正 春

はじめに

“生きた英語を”というスローガンが英語教育の分野に掲げられてから久しい。オーラル・メソッドやオーラル・アプローチなどの教授法が導入され、「外国語を理解し表現する能力を養い、言語に対する意識を深めるとともに、国際理解の基礎をつちかう」^①のために、生きたことばとしての音声をその中心に据えるという考え方は、現場でもかなり定着してきたように思える。テープレコーダーから流れてくるネイティブ・スピーカーの発音を真似ようと、ポーズの間に学習者が声を出したり、教授者の後について重要構文を何度も発音するという光景は、主として中学校の英語の授業の中では標準的なものであろう。

確かに、学習者は、日本語にない音を口にしたり日本語とは全く異質な文の組み立て方に接するなかで、自分の身につけている言語と趣きを異にする外国語としての英語を意識するであろう。しかしながら、その段階に留まっている限り、英語は、学習主体から離れた所に存在するだけで、ことばとしての消極的な意味しか持ち得ず、人間が集団を形成していくなかで使用するコミュニケーションの道具としてのことば、そして感情の発露としてのことばという意味あいは、全く薄れてしまっているといってもよいだろう。

生きた英語を教えていこうという方向を目指す限り、“対人間コミュニケーション”^②の一要素としてのことばという位置づけを、教える側が、はっきりと確認し、例えば身ぶりや表情など音声面以外のことばの要素にも配慮することが必要であろう。そうして、できるだけ生きた英語の使用に近い擬似場面が教室に設定され、その中で授業が展開されるのが望ましいと考える。

従来、英語教育は、ことばの四能力 (Hearing, Speaking, Reading, Writing) を学習者に開発し、定着させようと努めてきたが、さらにこれを総合する能力として“理解する能力”というものを考える時、ことばに付随する要素が、それを支える不可欠なものとして浮び上がってくるのである。

このように英語教育において、身ぶりや顔の表情といったものが、ほとんど考慮されなかった原因として、言語研究者のことばに対する考え方や態度を述べた次のような定義 — 人間がその思想・感情をなかに伝えるべく分節された音声を用いておこなう表現活動 (傍点、藤田)^③ — が影響しているのではないだろうか。多かれ少なかれ、大多数の英語教育者のことばに対する考え方も、それに似ていると言ってもよいだろう。

本論は、ことばの使用場面に現われる音声言語以外の要素に着眼し、それを研究した言語学者や文化人類学者の、二、三の理論を検討することによって、英語教授法の一つとして最近クローズアップされてきたドラマを使った指導^④を支える理論面の考察に対する一助としようとするものである。

I. プロクセミクス (proxemics)

人類学者エドワード・ホールは、長い間、人間が如何に空間を利用し、他者にある種の事柄や合図を伝達するかといった人間の空間に対する反応の問題に強い関心を持ってきた。彼は、人間の個人的な空間（なわばりや間合いなど）を研究したが、人間が空間をどのように使用するかについて、相互に関連する観察と理論に、プロクセミクスという用語を用いた。ホールは、この学問を標準化しようという試みから、多くの人間が使い分ける四つの空間 1) 密接距離 (intimate distance) 2) 個体距離 (personal distance) 3) 社会距離 (social distance) 4) 公衆距離 (public distance) ⑤ を分類し、さらにそれぞれを、近接相と遠方相に分けている。

1) 密接距離

㊤近接相

これは、恋人同志、ごく親しい友人関係、親子などがとるもので、身体的接触、もしくは、非常に近接した距離である。親しい間柄の男女にとって、この距離は、ごく自然なものであるが、そうでない場合にはとまどいが生ずる。密接距離では、音声によるコミュニケーションの占める役割がきわめて小さく、コミュニケーションは、他のチャンネルにとってかわられることが多い。

㊦遠方相 (6~18 インチ)

手を握ったりすることができる距離ではあるが、二人のアメリカ人 (男性大人) の間では受け入れ難い距離である。混雑した地下鉄やエレベーターの中などで、彼らが、自動的に、まわりの人に触れないように身体を固くするというはっきりとした行動の規則が観察される。もし、誰かに触れた場合には、“あなたの場所に侵入してすみませんが、周囲の状況が許さないのです。もちろん、私は、あなたのプライバシーを尊重していますよ。” というように身を引いたり、触れた部分の筋肉を緊張させたりする。また、この距離では、相手を凝視することは避けられる。

2) 個体距離

㊤近接相 (1.5~2.5 フィート)

個人が習慣的に自分と他の人間との間にとる距離で、この距離では、また、相手の手をつかんだり、握手したりできる。妻が夫の個体距離の中に入れても、何ら不思議はないが、別の女の人がこの距離帯に入ることは、たぶん何かもくろみがあることを示し、ゴシップやうわさをうむことにもなる。

㊦遠方相 (2.5~4 フィート)

身体的支配の限界を示す距離で、この距離をこえると、容易に相手に触れることはできなくなる。この距離帯の中では個人的な議論をすることは可能であり、二人の人が道で出会うと、通常、この距離にとまって会話をかわす。この距離によって伝えられるメッセージは、“私はあなたを寄せつけないでいる” から “私は他の客よりも少し近くにあなたにいてもらうことにした。” というものにまで及ぶ。

3) 社会距離

㊤近接相 (4~7 フィート)

一般に個人的でない用件を行なう距離である。ちょっとした社交上の集まりで見られたり、主婦が修理人や店員や配達人との間でとる距離でもある。上役は、座っている社員（例えば、秘書や応待係）に対する距離として、この距離を利用し、何を語らずとも、“お前は俺のために働いているのだ”という状況をつくり出し、威圧感を与える。

④遠方相（7～12フィート）

この距離で行なわれる業務上や社交上の対話は、近接相で行なわれるものより、やや形式ばった性格を帯びている。お偉方の机は、社員をこの距離帯内に止めるのに十分な大きさがあり、座っているだけで彼の地位を相手に感じさせることができる。この距離で重要なのは、会話がおこなわれている間、相手との視覚的接触を保っておくことであり、ホールによれば相手の目を受けとめそこなうことは、相手を避け、会話を滞らせることになるという。

社会距離（遠方相）の肯定的面は、人を相互に隔離し保護することである。会社や事務所で、応待係がおしゃべりをせずに仕事を続けられるのは、自分と訪問者の間にこの距離を保っているからである。一日の仕事を終えた夫と妻が、家でくつろいだ雰囲気を楽しむのもこの距離によるものである。

4) 公衆距離

⑤近接相（12～25フィート）

社会距離から公衆距離へ移ると、個人相互のコミュニケーションに明白で重要な変化がおこる。機敏な者は、何らメッセージを受けとっていない風を装うこともできるし、ごく自然にその場面から姿を消すことができる。

具体的にこの距離は、教室を埋めた学生達に対して教師が、従業員との会合の席上で社長が、それぞれとるものである。

⑥遠方相（25フィート以上）

動物にみられる逃走距離のように、政治家など公的に重要な人物の身の安全をはかるために保たれる距離である。この距離では普通の声で話される意味のこまかいニュアンスや顔の表情のちょっとした動きが感じとれなくなり、自然に声その他あらゆるものを増幅し誇張しなければならない。ことばによらないコミュニケーションの大部分が身振りや姿勢に変わる。それに加えて、話されることばはよりはっきりと発音され、口調はゆっくりになり、文体も変化する。元いての俳優は、気づいているが、彼らは、数世紀にわたって、観衆と舞台との間のこの距離を利用して、多くの幻想を生み出してきた。

このようにして、ホールは、人間が自分の周囲にパーソナリティの延長としてもつ距離帯を分類した。こういう距離帯の存在やその差に対する意識は、感覚の組織を異にする外国人との相互交流を通じて、一つの文化での距離帯やそれに対する態度が、他の文化では全く異なっていることを知ることによってはじめて得られるものである。この過程は、外国語を学習する際に、学習者が母国語と外国語との差異を知ることによって母国語に対する関心を高めていく過程に共通するところが

あるように思える。

日本では、国土が狭いといった地理的条件もあってか、起きて半畳寝て一畳といったように、生きていくのに必要なぎりぎりの広さで、生活空間を考えていくとか、部屋を選択する場合に、南向きといった具合に方向を重要視するといったような感覚がある。又、空間は事物の間の距離で、その間には何もないという西洋人の意識に対して、日本人は空間の形や秩序に重要な意味を見い出し、生け花や庭園における石の配置などにおける調和を追求している。

ホールの理論は、このような空間に対する認識に加えて、時間に対する態度の比較対照という面においても検討が加えられているが、人間相互の意志伝達に占めているこの空間の意味論と時間の意味論は、英語教授に際して、テキストに出てくる人物の行動 — 意識的なものだけでなく無意識に行なわれるものも含めて — を説明するのに大いに貢献するだろう。

II. キネシクス (kinesics)

キネシクスは、顔の表情や身ぶりなどからだを使って行なわれる伝達行動の科学に与えられている名称である。

現代の身ぶりのコミュニケーション研究は動物と人間の動きや表情といった伝達体系を扱ったダーウィンの『人間と動物における感情の表現』(1872年)にさかのぼると言われるが、身ぶりコミュニケーションという構造をもった行動分野の独立した科学的研究の開始は、バードウィッスルの『キネシクス入門』に跡づけられる。しかし、もっと直接的にキネシクス研究の発展と関連しているのは、記述言語学者の理論的さらに方法論的進歩と、カメラ、スローモーション映写機など最近目ざましい進歩を遂げている機械の力であると思われる。前者は、アメリカインディアンを主な材料として、その音声行動を鋭く分析し研究していく中で他の種類の行動研究に対しても使うことのできる一つのモデルを提供した。他方、後者は身体の動きを研究する目的で、最初は静止写真から行なわれたが、しだいに映画のように動きを伴う映像が利用され、人間相互の伝達行動に現れる身体の動きの示す意味の綿密な研究へと進んできている。

さて、キネシクス研究を軌道にのせたバードウィッスルは、からだの動きや顔の表情が、学習されコード化された体系をもち、体系的に整備された伝達の体系への貢献をしているという二つの面において、話しことばに匹敵する身ぶりの言語があると考え、アメリカ人のキネシクス構造を余すところなく記述し分析しようとした。そして、身体の行動を自然の社会的な状況の中で研究をしていく中で、いかに不連続な顔の表情(“微笑”や“しかめ面”)でも、いかに明示的な身振りや姿勢(“うなづき”や“軍隊式の直立の姿勢”など)といえども、いつも、他の行動に依存し体系的に変化する全く複雑な行動の部分であることがわかってきた。インフォーマントによって提供される身体の行動の構成分子の集合は、音声言語における音素と同様、それだけでは、機能的な言語行動の中に加わることはできないものであり、又、そのような行動の意味に関しても、その行動に対してすばやく反応する人もいれば、複数の意味解釈の中からよりよい選択をしようとする人もいるという状況の中で、語が持つ意味機能の可変性と同じ性質をもつと考えられた。意味は、ここでも

孤立した事象とその周囲の適当なスペクトルの間の関係をおおう術語として使用されている。

このようなキネシクス研究の過程で、作業の手法として採用されたのは、発話を中心とした資料を検討し、音韻論や形態論、さらには語彙素や統語関係の分離抽出と記述の方向へ向かうという構造言語学の手法だった。パードウィッスルは、言語学の類推的なモデルを使って、身ぶりを従属形態 (bound morph) として位置づけ、それを構成する kina(体の動きの知覚しうる最小単位) や kineme (手掛りの最小クラス)、その複合した kinemorph (語幹+接辞に相当するものから成る) といった単位を抽出し、さらには、発話における文に相当するものまで考えている。分析のそれぞれのレベルについては、kinology, kinemorphology, kinesyntax という領域を考え、拡大結合された身体の動きによる行動の連続体を、段階に分けてその有意味な形式を探究し、全体的な構造を明らかにしようとしている。

記述の簡略化を目指して、彼は、具体的に身体を、顔を除いた首から上の全体、顔、首、肩と胴体、肩から腕と手首、手首から先の手と指、ヒップと脚とくるぶし、くるぶしより下の足という八つの部分に分け、それぞれについて数十の動きに分類し記号化している。その表記法は踊りの振付師が踊りを基本的なステップに分けて記号化するやり方と似ている。例えば、顔における kine の一例として、まゆ毛の上げ下げは bb\N という風に記号で表わされている。又、まゆ毛が、ある種のコンテクストにおいてあがり、短い時間それが継続した後、ゼロ地点すなわち基本位置にもどるという動きは、/K// という記号で表わされる kineme の allokineme (これも言語学的類推で、allomorph のようにお互いに置き換えられる種類のもの) の一つとして作用する。このまゆ毛の上げ下げは、疑念や疑問のコンテクストにおけるメッセージの繰り返しを要求する音声における上昇調のイントネーションにあたり、実際の発話の際には、しばしば、この両者が同時に起こる。こういった現象は、キネシクス研究においてよく見られることで、身ぶりが、話しことばも含めた全体的な行動の中に位置づけられるのはごく自然である。

現在、キネシクス研究は、異なってはいるが密接に関連した二つの方向に進んでいる。すなわち、伝達的な身ぶり行動の意味ある形態を分離させようとする試みが行なわれる一方、別の方面では、そういう形態が機能するコンテクストの諸レベルの性質についての見通しを得ようという試みがある。後者の作業は、最終的に意味と関連し、コンテクスト分析 (context analysis) という術語で呼ばれている。この分析法において、意味は、コンテクストのある特定レベルで、特定の手掛りの有無によって引き起こされる行動の相違であるとされ、特定の手掛りの意味範囲は、その手掛りの発生が観察されるコンテクストの範囲に支配されると考えられる。シェフレンは、心理療法の立場から、周囲の状況をできるだけ限定した部屋の中でこの分析研究を進め、二人の個人間相互に行なわれるコミュニケーションに特徴的な単位を分離したと報告している。数分間という伝達行動の連続も、これによって、統語的な文や個々のキネシクスを構成しているものと同じように構造的に示されることが約束され、コンテクストの比較対照における特定の伝達要素の機能を客観的に測る可能性を大きくしている。

この他の方法としては、ゴッフマンなどが、正確な社会的状況における個人間相互の行動の構造

的な論理を体系的に記述しようとしている。

以上、バードウィッスルを中心としたキネシクス研究を概観してきたわけだが、いくつか問題点をあげてみたい。まず、人間の身体の動きを全体にわたって詳細に記述しようとしているために、分類がこまかく、記号の数も非常に多くなっていることだ。研究の歴史がまだ浅いせいもあるのですが、これから研究が進むにつれて表記法に改良が加えられ、数の上でも整理統合される方向に向かうだろう。問題は、むしろ、キネシクスの研究方法が、構造主義言語学のモデルをそっくりそのまま取り入れているところにあると思う。音声と身ぶりを相互に関連があるからといって、質的に等価なものを見なして、学問の対象としたのは妥当だろうか。身ぶりに、いわゆる言語に見られる一次元的線状性や、二重分節性（意味のレベルと音声のレベル）といった特徴を同じように見い出せるのか。場面に対する依存度の決定的な相違ともあわせて、この両者を同じ次元で論ずることは、無理であるように思える。今後は、シェフレンの研究に見られるように、できるだけ場면을限定した上で、音声と関連させながら、キネシクス構造の解明を目指すという方向が有望視される。

III. パイクの理論

先にあげた文化人類学者らとならんで、言語と非言語を統合した形で、人間の言語行動を考えた言語学者にケネス・パイクがいる。

彼は、人間の目的をもったすべての行動は構造をもっており、そのような活動のすべてにわたってある種の基本的な特徴が共通していて、その結果として、人間行動の構造のあらゆる種類の研究にわたって例外なくその理論と研究方法を発展させることができるはずだという問題と取り組んだ。もしそうであれば、理想として、一つの基本的な構造理論と術語の集合と方法論が、言語や儀式的行動やスポーツ、さらに思考過程そのものの分析に適用されるだろうと考えた彼は、幾つかの概念を提唱した。

まず、“波” (wave) と“分子” (particle) という概念である。あらゆる人間行動の分析をする際に、我々は、行動が動きの止まらない物理的連続体であるという事実と、あたかもそれが不連続ないくつかのまとまりに分かれているかのようになり、人間がお互いの行動に反応するという事実とを考慮しなければならない。“I know John.”という文を発する際に、いかなる音の間にも句切りがないように、又、指揮者のタクトの運びが連続的であるように、人間のすべての目的ある行動単位にも連続体を成す物理的基盤がある。

次に注意しなければならないのは、こういう連続体は、安定して揺れ動かないものではなく、そこには、行動のいくつかの“波”があるということだ。潮の干満、上下の動き、安定した状態から変化の状態への動きなどの物理的な波が、人間の諸行動の中にある。ごく小さな波が、しだいに大きな波になっていくのと同様に、一個の子音や母音は、より大きな音節に組み込まれ、目の動きは、顔の表情の流れの中へと入っていく。

しかしながら、重要なのは、人々が自分達の文化の中の行動に反応するのは、おそらく行動が非連続的な部分から成る連続体であることを無意識のうちに理解しているからということと、行動する側も、それを受け取る側も、行動の波の間の移行状態には、ほとんど関心を示さない。こういう

わけで、人間行動の純粋に物理的な分析は、波から成るものとしてその分析が行なわれるかもしれないが、人間行動の文化的な分析は、不連続な行動実体としての分子から成るものとして研究される。パイクの理論は、物理的な基盤を把握しながら、行動をより小さく不連続な単位によって構造化するという形で、この両面を統合しようとするものである。術語としては、自然相の記述 — 他のコードの意味単位を外面的に眺めて区切りをつける — を目指す方向を“エティック” (etic) と呼び、文化相の記述 — そのコードの意味単位を内部から見て区切りをつける — を目指す方向を“エミック” (emic) と呼んだ。“エティック” “エミック” という用語は、両方とも、アメリカ構造言語学における phonetics, phonemics という言語音声学研究する学問名の応用であり、それが文化的な事象一般の研究にまで拡張されたものである。そして、行動の不連続な分子には“eme” 又は“emic unit” という名称が与えられた。その一つとして考え出されたのが“行動素” (behavioreme) ⑥ である。

“行動素”は、行為者が意識的に注意をはらったり、目的を自覚しながら行なうような、階層的な構造をもった行動の単位として定義され、具体的にその典型的なものとしてパイクが挙げているのは、フットボールの試合、教会における礼拝式、詩の朗読、家庭での朝食などである。このような例に見られるように、行動素は、非言語的な事象や言語的な事象、又、両者の複合された事象から構成されるが、パイクが、重要な意味をもつものとして見ているのは、最後のタイプである。そして、そのような言語的行動と非言語的行動の両者が結合している行動は、言語学者だけでも、文化人類学者だけでも、その分析をすることができない。例えば、歌を歌いながらことばを順番に抜いていく歌遊びを考えてみよう。“大きなくりの木の下で…” とくり返して歌っていく中で、“大きな” という語をぬいて、そのかわりに手を広げる動作をしたり、“木” という語を声に出さずに、それを両腕をまっすぐ上に上げる動作に変えたりする。最後には、歌全体が動作に置き換えられるのであるが、このような行動を、言語的な要素と非言語的な要素という風に別々に記述しても、一つの行動の単位としてはうまく説明することができない。そこでパイクは人間行動の構造の統合理論として、言語的な事象と非言語的な事象の統合を強調するのである。

彼は、さらに、“行動素”を三つの下位範疇に分け、それを、manifestation mode, feature mode, distribution mode という名称で呼んでいる。大ざっぱに言ってこれらは、それぞれ、従来の音韻論、形態論、統語論が取り扱っているレベルに相当すると考えられるが、異なっている点は、従来の理論が音韻論→形態論→統語論という形の整然とした一つの流れの中で理論が展開するのに対して、パイクの理論は、物理的基盤をもった三つのmodeが、それぞれに、有機的な関連をもった形で渾然一体となつて一つのエミック単位を構成している。公式的には、一つのエミック単位のmodeの特徴の表出は、次のように書かれる。

	F	U : emic unit
U =	M	F : feature mode
	D	M : manifestation mode
		D : distribution mode

この公式は、言語行動と非言語行動の両方に、等しく適用することができるものとしてパイクの理論の中で定式化されており、具体的にとりあげられた、朝食などの場面における会話の中に含まれることばや動作の分析は、このような理論を基礎として、行なわれているのである。

マリノフスキーが、狩猟や漁撈や農耕といった活動の中でのことばと動作の関係における“context of situation”の重要性を強調して以来^⑦、フェースなど何人かの研究者が言語行動と非言語行動の関連について研究を進めてきたが、具体的に理論を展開したという点で、このパイクの業績は大きな位置を占めていると言える。

IV. ドラマによる非言語伝達の位置づけ

先の章でとりあげられた三つの理論を踏まえたと上で、英語教育の中にことばの非言語伝達の側面を有効に位置づける手段として、ドラマが考えられる。ドラマといっても、舞台の上で大道具なども使ってやるというような本格的なものではなく、教室の中で会話や劇の教材の指導をする際に、ちょっとした身ぶりをことばに添えて、より実際の発話場面に近い状況の中で、英語の授業を展開させようというものである。場面にあった自然なことばにしようとするために、学習者は、必然的に、発音を何度もくり返し練習して、できるだけことばを自分のものにならなければならないという過程を要求される。内容の理解の度合は、発音されたことばとそれにつけ加えられた動作によって、教授者がチェックできるということになる。

このようなドラマによる指導の長所を幾つかあげてみると、まず、会話の進行の中で学習されるものが、単に論理的な意味だけでなく、心理的な意味も含めた単語や文であるということである。さらに、意味的に関連のある文が対話の中でやりとりされるので、その中に含まれる文型や文法事項の記憶が容易になる。第二に音を反復して練習する中で、正しい個々の音の発音に加えて、外国語学習者にとって学習することが難しい強勢や音調といったかぶせ音素の学習が促進される一方で、英語らしいリズムというようなものも身につけることができるだろう。第三に、これが、free conversation への一つのステップになるということだ。暗記しているものを何度も口に出すこの過程では、“何を話せばいいか？”といった話す内容についての心理的抑圧が、ある程度回避されるので、この段階を何度か踏み、意志伝達の手段としての英語をある程度獲得できれば、free conversation への移行は、割合、スムーズにいくように思われる。第四に、内容の読み取りに際して大きな手助けとなることがあげられよう。せりふと動作が一体となって展開する会話や劇を経験する中で、文章の中に出てくる登場人物のことば使い、表情や身ぶり、間合いのとり方などにも注意が向き、その人物の性格や癖などを理解する手掛りになるだろう。最後に、従来の英語学習の際に見られた朗読調の英語やただ単にくり返される文型練習が学習者に受動的な学習姿勢を作り出したのに比べて、この方法は、はるかに学習者の想像力を刺激したり興味をひき出したりすることができ、授業は活気ある展開を示すだろう。

問題点としては、教材としてとりあげる内容に片寄りが出てきて、文法面での不備が出てくる可能性があることと、授業の形態に幾分変化が起こることである。前者は、教材の選択にあたって、十分にその文法的内容を検討し、それを適切に選択・配置することによって、解決されるだろう。又、

後者については、黒板を背にした教授者とそれに相対する学習者という授業風景が一変して、教授者が学習者の中に一緒に入るという形で授業が進められ、言ってみれば対話や劇を演ずる側とそれを観る側という分かれ方になる。教授者の役割としては、その指導・助言が中心になるだろう。

このようにして、ことばを、純粹に言語的な側面とそれを支える非言語的側面の総合されたものとして捉え指導していくことにより、これまで、盛んに主張されてきた言語教育における言語活動の重視が、さらに一步前進し、限られた時間の中で行なわれる英語教育の効率が高まることになれば幸いである。

[注]

- ① 『中学校学習指導要領』(文部省)
『高等学校学習指導要領・外国語編』(文部省)
- ② 西江雅之「ことば・言語・文化」『伝統と現代』第45号(伝統と現代社)昭和52年
- ③ 小林英夫『言語学通論』(三省堂)昭和47年 25ページ
- ④ 『英語教育』第26巻第5号(大修館)に英語指導と劇、劇化の特集がある。
- ⑤ 訳語は日高敏高・佐藤信行共訳の『かくれた次元』による。
- ⑥ この単位に対する術語としては、ナーデルが“behavior cycle”を用いている。
- ⑦ Malinowski, B, 'The Problem of Meaning in Primitive Languages'.
Supplement I to Ogden and Richards. 1935

— 参考文献 —

- o Birdwhistell, R. L., 'Kinesics', "International Encyclopedia of the Social Sciences 8" edited by David L Sills, The Macmillan Company & The Free Press.
- o —————, "Kinesics and Context" Penguin Books Ltd, 1973
- o Fast, J. "Body Language" Pocket Books, 1975
- o Hall, E. T. "The Silent Language" Anchor Books, 1973
- o Leathers, D. G. "Nonverbal Communication Systems" Allyn and Bacon 1976
- o 中野道雄『ジェスチャーの英語』(創元社)昭和52年
- o 西江雅之「“伝え合い”の人類学」『言語』(大修館)昭和51年1月~4月、6月~11月
- o Pike, K. L. "Language — in Relation to a Unified Theory of the Structure of Human Behavior" Summer Institute of Linguistics Part I 1954 Part II 1955 Part III 1959
- o —————, 'Toward a Theory of the Structure of Human Behavior', "Language in Culture and Society" edited by Dell Hymes, 1964